

# フローティング・ハイパーテキスト

## — 概念の起源と展開 —

森 田 均

Floating Hypertext

## — The origin and applications of the concept —

MORITA Hitoshi

**Abstract:** This paper presents the concept of “Floating Hypertext”: the new origin to all metamorphoses of the text, narrative and media representations. Floating Hypertext could be widely applied to the field of the humanities.

### 1. はじめに

本論文は、これまでに公表したハイパーテキストというテクノロジーの現代的な意義を再検討し、文学と認知科学及びコンピュータ・サイエンスの領域を横断して、文学的ハイパーテキストの試作と評価並びに評価方法の精緻化を踏まえて新たな研究手法獲得の可能性を論じる試みの理論的な帰結点である。研究の特徴は、ハイパーテキストを相互作用の場として両極にある領域を架橋する試みを行ったことである。また研究の成果は、以下の観点から領域を横断するものである。

#### A) 文学から認知科学及びコンピュータ・サイエンスへのアプローチ

ハイパーテキストを文学理論で提唱されたテキスト理論や読者論の実践の場として位置づけ、試作と読書プロセスの実験を試みた。文学理論を検証するためにハイパーテキストを利用可能であることを具体例から明らかにすることができた。

#### B) 認知科学及びコンピュータ・サイエンスから文学へのアプローチ

文学を神秘化せずにコミュニケーション行為の延長上に位置づけ、文学の理解プロセスを人工知能における知識表現の拡張によりモデル化する試みを行った。文学をコミュニケーションと位置づけることによって、コンピュータ・サイエンスから文学研究への接近を果たすことができた。

### C) 文学に関する領域と認知科学及びコンピュータ・サイエンスの統合・拡張アプローチ

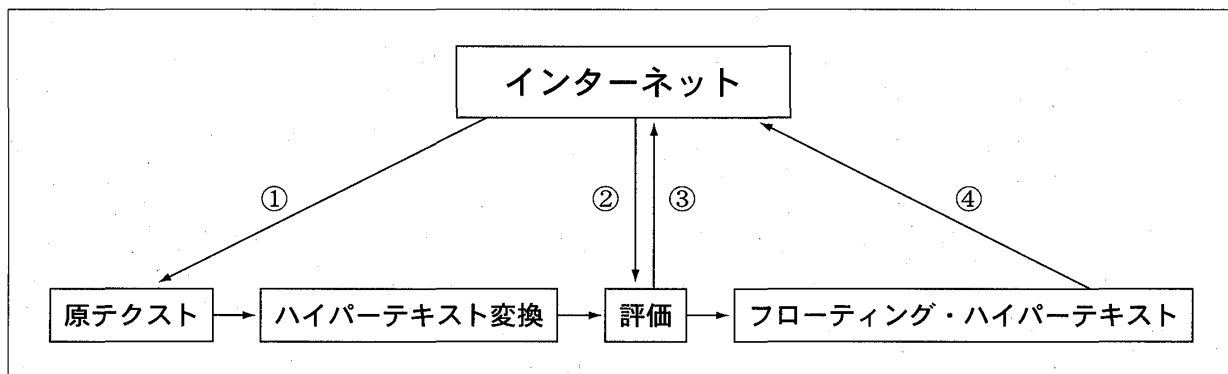
文学研究にグラフ、地図、樹状図を導入することで新たな手法をもたらし、一方で評価の厳密性を向上させて、資料の悉皆調査を行った成果に対し、追試験可能な分析手法が有効であることを示した。

## 2. 出版点数に関する修正と追加

まず本紀要前号に引き続き、前々号並びに前号で公表した論文[森田 04] [森田 05]において示した「注文の多い料理店」の出版点数について最新のデータに基づき修正と追加を行う。一連の論文で依拠した目録のうち最新版[宮沢賢治学会91-06]に補遺が掲載された。さらに、筆者による資料収集によって確認できた2005年末の出版点数は、後述する青空文庫での電子テキスト公開を含めて、翻訳絵本1点、その他の形態11点の計12点であった。1924年の童話集初版以来の総出版点数は、265となる。

## 3. 研究手法の再確認

本研究は、コンピュータを利用したテキスト解析の新展開を希求するものである。テキストの自動生成が究極の目標であるが、徹底的な解析を生成と表裏一体の作業として位置づける。



<図1：原テキストからフローティング・ハイパーテキストへ>

図1は解析手法をモデル化したものである。①は、素材となる文学テキストが電子化されてインターネットで公開されていることが前提となる。本研究で原テキストとした「注文の多い料理店」は複数の電子ファイル配布サイトから入手可能となっていた。それが2005年1月からは日本最大のテキスト配布サイトである青空文庫でもファイルが公開された。②や③の操作はネット上の各種目録から比較対象を検索するものである。この作業は蓄積されて前号の論文及び本論文第2章で述べたような経過報告の元データとなる。

## 4. 研究の過程

物語文法[Rumelhart 75], 因果関係によってテキスト理解のプロセスを示した[Hobbs 90], 文学と認知科学を架橋した[Turner 96]等の業績で明らかのように、文学テキストの鑑賞や生成を人間の高度な知的活動と位置づけ、その構造や認知プロセス等の諸現象を解明することは、認

知科学や人工知能における重要な研究テーマとされて来た。本研究では、前述したようにハイパーテキストというテクノロジーについて現代的な意義を徹底的に検討するために、文学と認知科学及びコンピュータ・サイエンスの領域を横断して、試作と評価のみならず評価方法の精緻化と新たな研究手法獲得の可能性を論じる試みを行った。

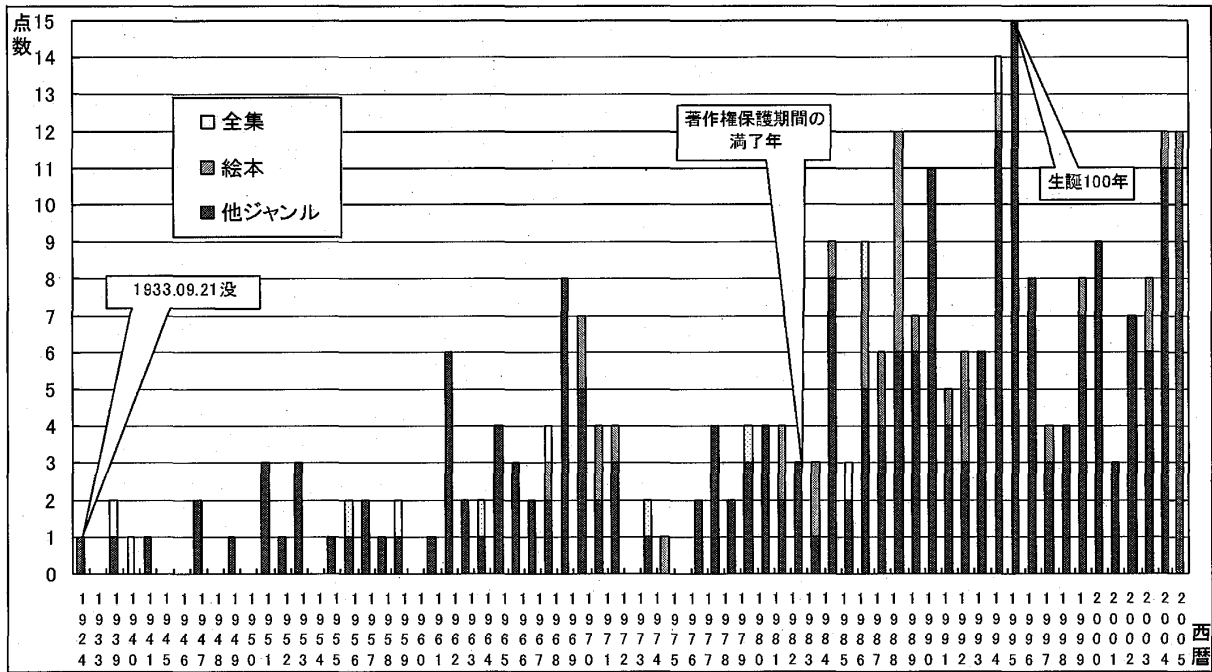
研究の経過は、以下のようにまとめることができる。

- 技術及び思想としてのハイパーテキストを歴史的に概観し、コンピュータ・サイエンスと現代思想との接点からハイパーテキストの今日的な意義をまとめた。また文学テキストは、コンピュータ・サイエンスでも研究対象となることをテキストとハイパーテキストとの関係から明らかにした。[森田 03]
- 文学理論にとってテキストという実験フィールドが成立する過程を描き、受容理論（「読む」文学理論）がハイパーテキストと親縁性があることを示し、原テキストを階層的にクラスタリングすることでハイパーテキスト化を実現する具体例（「デマ」）を示した。[Morita 99][森田 00]
- 小説という形式の中で実験的な試みを行った文学テキストをハイパーテキスト化することによって、従来の紙によるものとは異なる表現が可能であることを具体例によって示し、読解実験による評価を行った。その結果、特定の解釈に基づくハイパーテキスト化が可能であること、読者と作者との関係に着目した文学理論を検証する場としてハイパーテキストを用いることが可能であることを示した。[森田・藤田 01][Morita & Fujita 01][Morita & Fujita 02a][Morita & Fujita 02b]
- 文学をコミュニケーションとして捉え、テキストの修辞（「書く」理論）に基づき文学テキストの論理構造を文間の因果関係から検討し、文学テキストを神秘化という呪縛から解き放つ試みを行った。文学テキストの解釈にあたっては専門知識に加えて感性や感覚という再現不可能な尺度を用いる文学研究の手法に対して、再現あるいは追体験可能な状態とするためにテキストの条件を整えるための方法論を示した。「常識の抽出」は自然言語処理における「常識」の扱い方の基礎技術と関連付けることができる。[藤田・森田・西島 01][藤田・西島・森田 06]
- 変換の自動化を目指して、リニアな状態にある文学テキストから論理構造を抽出することによってハイパーテキスト変換を行う手法を示し、さらに読解実験ではなくオンライン目録（OPAC）等から手がかりを得た他メディアと精度及び再現率を比較することによって評価を行う手法を示した。またこの評価方法の精緻化を試みた。比較対象の資料的価値を高めることで、様々な表現手段の特性が明らかになり、その結果試作を評価する手法の信頼性を向上させることができた。[Morita & Fujita 03][森田 05a][森田 05b]
- 文学テキストのハイパーテキスト変換という工学的な研究を推進することによって、従来の文学研究ではあまり考慮されることのなかったグラフ、マップ、樹状図を用いた研究手法を導く可能性があることを示し、コンピュータを人文科学研究に役立てる新たな領域があることを展望した。[Morita & Fujita 04][森田 04][森田 05a]

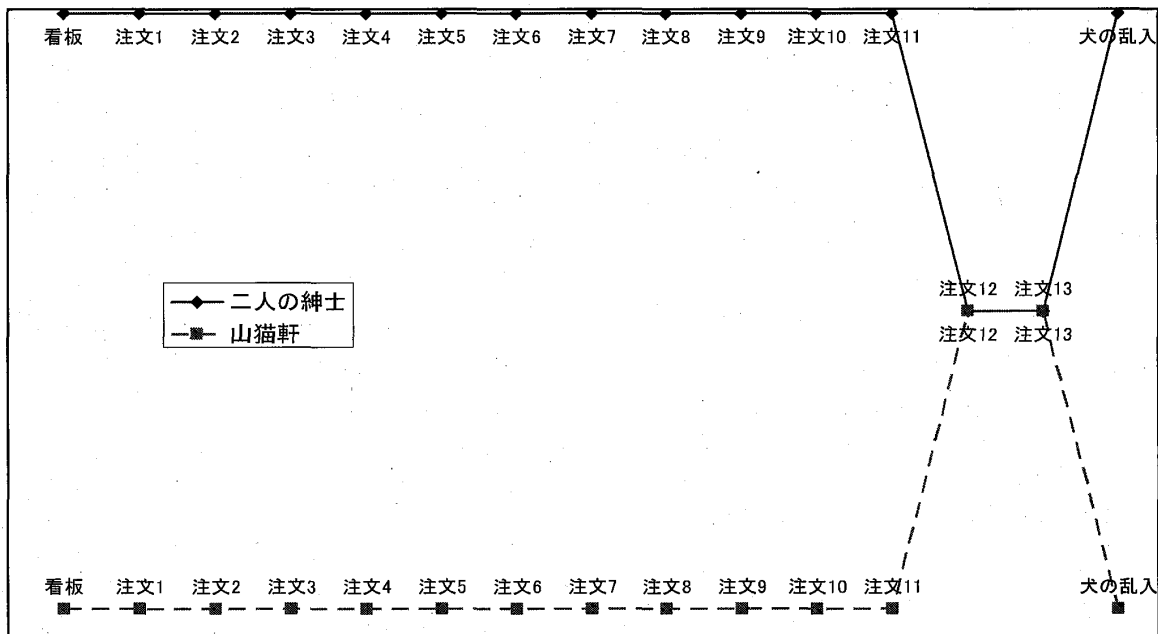
## 5. グラフ、地図、樹状図

比較文学という研究分野に新たな手法をもたらす試みとして、文学の一般的なあるいは抽象的なモデルを求めるために[Moretti 05]は、時間的にも地理的にも膨大に広がる様々なテキストの解釈ではなく、グラフ、地図、樹状図を用いて地理学や生物学の手法を援用することを宣言して

文学研究の論文に図表を取り入れた。これに対して[Morita & Fujita 04]及び[森田 04]で明らかにしたが、筆者による従来の研究で「注文の多い料理店」の刊本や二次的作品の網羅的収集から得られたグラフは、図2に示したように、ある一つのテキストが時間経過によってどのように増殖するのか、また表現形態の広がり具合を概観するために作成したものであった。また、テキストの論理構造から図3のような論理マップを示すことができる。この地図は、Moretti が地理的なものを用いているのに対して物語世界の論理マップを描けたにすぎない。これは、当該テキストの内部に地理的な名詞が含まれていないことによる。

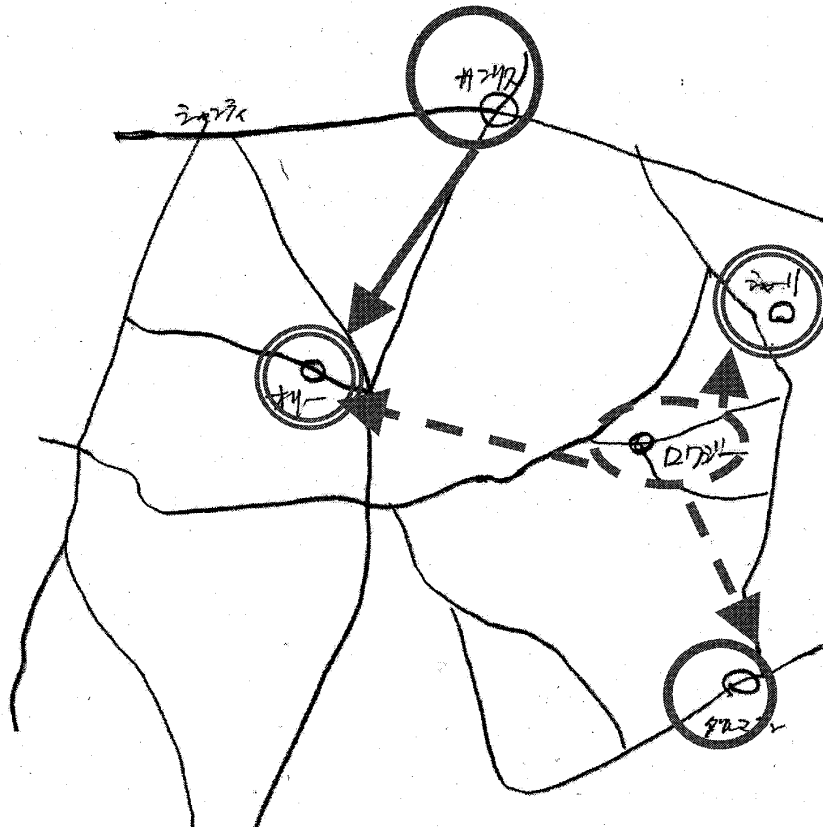


<図2：「注文の多い料理店」のグラフ>



<図3：「注文の多い料理店」の地図>

地名が重要な構成要素となるテキストでは、図4のように文字通り地図を用いることができる。[Nerval 1854]に関して、[Hobbs 90]では語り手が想起する人物や場所によって時間軸の変更があっても論理的結合性を保つテキストの事例として詳細な検討を行っている。一方で [Jean 64] はフランス語動詞の半過去で示された「現在」が全体の時制の主軸になっていることを示した。これらに対して、ヴァロア地方地図にシルヴィ、アドリエヌ、オーレリーという3人の女性の移動をプロットすることで「地図」利用の一例を示すことができる。移動を表す矢印は人物ごとに交差しているが、これは時制（時間軸）の違いをも示すものである。シルヴィは全てロワジーを起点に移動している。

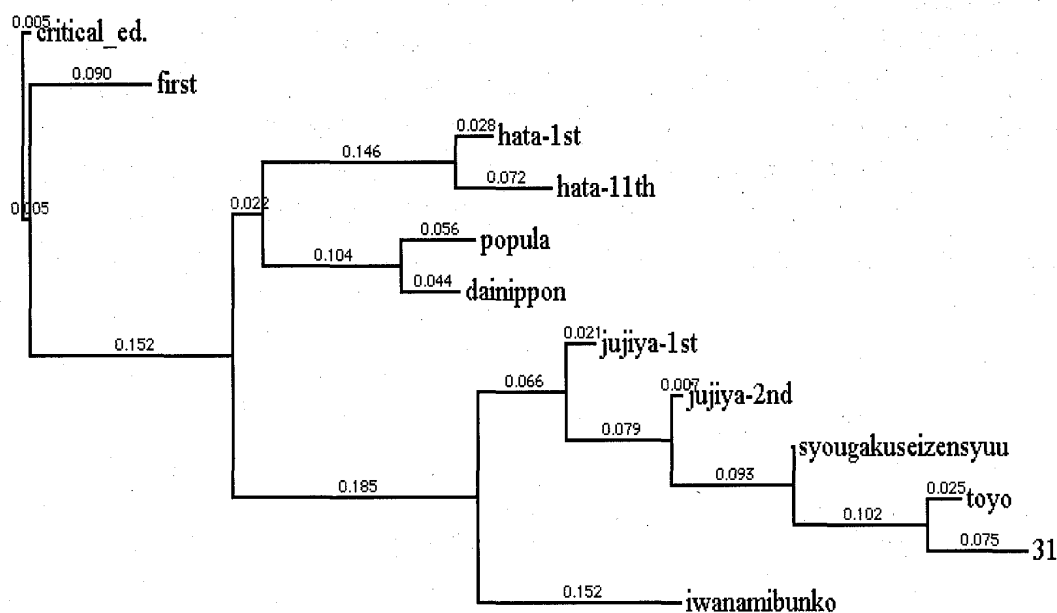


<図4：「シルヴィ」の地図>

([Nerval 1854]の邦訳付録地図を基にプロット)

Moretti の樹状図は、推理小説のサブジャンル生成の模様を描いたものである。筆者は、図5に示したようにテキスト校異の共起関係を基にして刊本の親子関係を明らかにした。

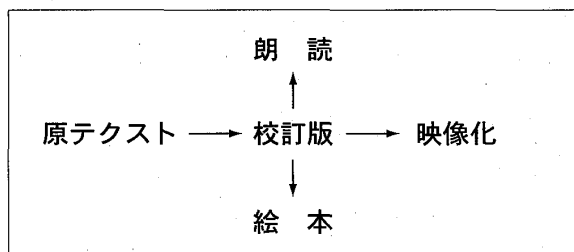
このように、本来は文学に対するマクロ的アプローチの手法を特定のテキスト研究に用いるためには、なお一層の検討が必要となる。さらに、生原稿や初版本を重視する従来の文献学的研究と同根のもので原テキストを起点としたこれまでのメディア比較やメディア変換の手法に対して、ハイパーテキスト研究の成果から派生して、特にテキスト評釈において従来の文学研究へ寄与するモデルを示す。



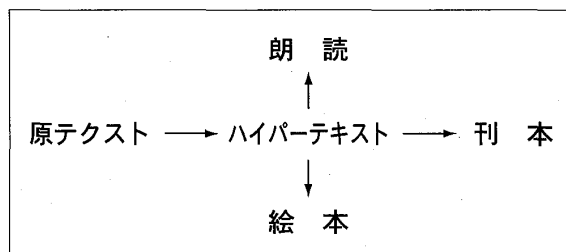
<図5：「注文の多い料理店」の樹状図>

## 6. フローティング・ハイパーテキスト

フローティング・ハイパーテキストとは、テキスト解釈や表現形態研究のために、中間的な存在としてハイパーテキストを用いる提案である。[Morita & Fujita 04] [森田・藤田 05]



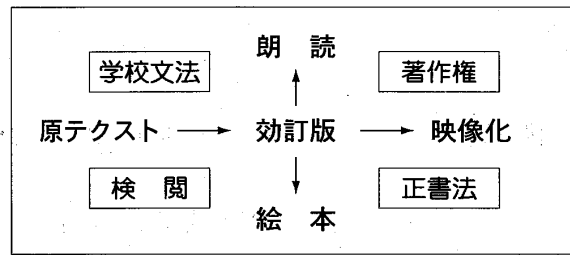
<図6：原テキスト起点の考え方>



<図7：フローティング・ハイパーテキスト>

従来のメディア比較やメディア変換の手法は、原テキストを起点とした(図6)。これは、生原稿や初版本を重視する従来の文献学的研究と同根である。あくまでも印刷されたテキストが原点となる。そこで、図7に示すようにハイパーテキストを全ての比較の基準とする考え方を用いる。これは、テキストの原点をどこにするかという問題を提起する。

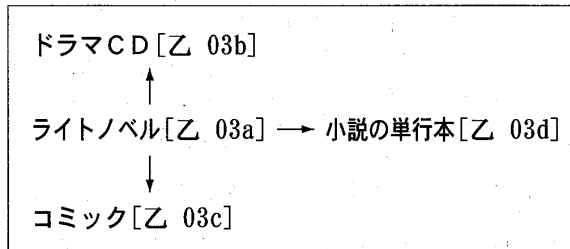
ただし、手稿などのオリジナルを求めるのではなく、「変換」の可能性を徹底して探ることもある。また、あらゆる変換の原点をテキストとして、その表現形態をハイパーテキストとする。ハイパーテキストは、あらゆる表現形態の中間的な役割を担うべく「中心」に位置するわけである。実証的な手法を崩さずにこのモデルを精緻化するために、まず現段階ではテキストから流布されたものの痕跡を探った。従来の文学研究と一線を画するために、深層に立ち入ることを最大限避けあくまで表層からのアプローチを貫いたわけだが、この手法からテキストから画像や音への変換ルールの獲得を目指すこともできる。



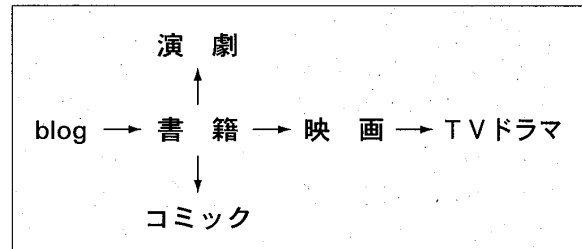
<図8：テキスト外部の要因をプロット>

一方で、図6には図8で示したように[森田 04]で用いたテキスト外部の環境あるいは要因をプロットすることもできる。

また、個別のテキストが複数の表現形態に展開された事例を図示するためにも用いることができる。同一の作り手が関与した事例として[乙 03]を起点とするものがある。この事例については後述する。



<図9：「君にしか・・・」[乙 03]の展開例>



<図10：「電車男」の展開例>

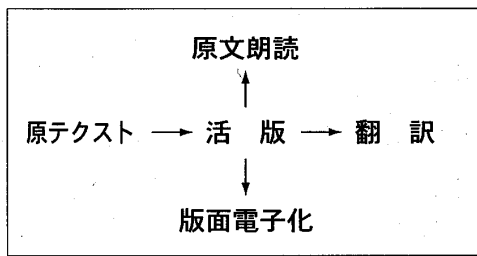
この他に作者が同一ではなく、あるいは作者の存在さえも希薄となった事例もある。図10は[朝日新聞 05a]に基づいて作成したものである。ここではネット上に出現したテキストが書籍の形式を取ることによって著作権管理システムの中に組み込まれ、同時に他の表現手段へと「合法的」に展開されたことが明らかになる。ただし、この考え方ではあくまでも印刷されたテキストが原点となってしまう。また[朝日新聞 05b]で示されたようなメディア展開の慣習と異なる展開となっているという事例としての特徴を明確にすることはできない。そこで、ハイパーテキストを全ての比較の基準とする図7に示した考え方をを用いると、テキスト展開の事例をよりダイナミックに提示することができるようになる。

## 7. 活版印刷をめぐる物語型資料

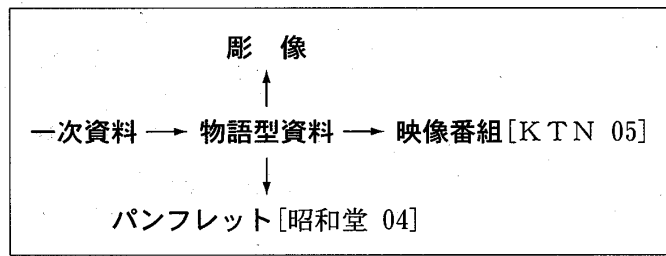
前章では、ネットの中に出現したテキストの展開という現代的、同時代的な問題にフローティング・ハイパーテキストのモデルをいかに適用できるかを検討した。

ここでは、時代を大幅に遡り天正時代のテキストについて考察する。このテキストに対しても本研究では表層的なアプローチを貫き、具体的な目的としては資料のデジタル化方策の検討を念頭に置いたものである。

日本人として最初にグーテンベルク式の活版印刷機を操る職人となったのは、コンスタンチノ・ドラードであった。天正少年使節の従者として「日本人」コンスタンチノ・ドラードの名前が明確に記された資料は、『原マルチノの演説』である。これを含めた資料が筑波大学附属図書



<図11：原マルチノの演説>



<図12：ドラードの「物語」>

館の Web「天正少年使節と『原マルチノの演説』」(<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/tokubetuten/frontpage.html>)で公開されている。この Web には原本の画像，及びその内容を起した文字データと逐語訳がある。さらに原文ラテン語の朗読を音声データとして公開している。このコンテンツの状態は，フローティング・ハイパーテキストの概念[森田・藤田 05] [森田 05a] [森田 05b]に基づいてまとめると図11のようになる。

一方で，2004年には諫早市立諫早図書館にコンスタンチノ・ドラード像が寄贈された。像の前では[昭和堂04]が配布されており，関連資料も明記されているが，写真さえも存在しない歴史上の人物を像としたもので資料的価値よりも顕彰を目的としていることは明確である。この場合は，図12に示すような状態である。図では「物語型資料」としたが，これは蓄積された資料群から構築されたものではなく，非常に乏しい一次資料に想像力を加えて紡ぎ出す「物語の原型」あるいは「物語の種」[森田 06a]である。資料の内容分析や校訂などを手法あるいは目的とした研究では不可能であるが，表層的なアプローチによるとこのようなモデルを示すことができる。なお，[森田 06a]では[森永62]と[ユニオン03]を物語の種とそこから得られた映像作品の事例として示したが，[NHK 96]（原作としては[市川 05]）がある。

## 8. 起源のないテキストのモデルとして

既存のテキストを視覚障害者または聴覚障害者向きにバリアフリーとした表現形態など，特定の目的を持ったメディア変換は，表現の多様性を求めるものとは別に社会的要請に応えるためのものである。ところが，こうしたバリアフリー形態においてもビデオ映像のうち，どの部分を副音声とするのか，またどの部分を字幕にして説明するのかという点については，経験や勘に頼る極めて恣意的な操作が行われており，場合によっては音・画像・テキストによる表現が同時に表示されてしまうなど方法論は整備されていない。本研究を進展させると，こうした分野にも貢献が可能となる。そのためには，テキストをめぐる考え方からも導き出される手法として，原テキストからどれだけ離れることができるのか，またどのような変容が可能なのかを探る必要がある。

なお，フローティング・ハイパーテキストのコンセプトは，「ハイパーテキスト形態の物語を作品とするのではなく，それを起源なき作品の一種の保管庫とする」，あるいは「様々な物語がそこから発生しまたそこに流れ込む」[石井 06] [佐久間 06]ものとして評価されている。

## 9. メディア表現の可能性

本研究では，工学的な研究が人文科学に寄与するための思考モデルとして，テキスト解釈や表現形態研究のために，中間的な存在としてハイパーテキストを用いることを提案した。構造の解



明は、生成へとつながる。フローティング・ハイパーテキストは、現在のところ解釈のためのツールもしくは構造分析の手段にすぎない。しかし、テキストから画像へまたテキストから音声へ同一素材が様々に変容する具体例から、メディア変換のルールを抽出することは可能だと考えられる。本研究では、「表現形態の拡張」と「論理構造の乗り物」という二つの役割を担わせてテキストからハイパーテキストへの変換という限定的な手法の一端を示した。今後は、テキストから画像や音声を生成する手法の研究を志向したい。メディア変換の実例は、「注文の多い料理店」という種類のテキストのみであるが網羅的な調査収集を終えている。コンピュータ・サイエンスが人手による営為の分析とモデル化を通して現実解を探る挑戦を続けているものだとすれば、ここで述べた展望は荒唐無稽ではない。

## 10. 研究全体の結論

本研究は、ハイパーテキストをテキスト理論や読者論の実践の場として位置づけ試作と読書プロセスの実験を試みたく文学から認知科学及びコンピュータ・サイエンス、読書をコミュニケーション行為と位置づけ文学テキストの理解プロセスを知識表現の拡張によりモデル化する試みを行った<認知科学及びコンピュータ・サイエンスから文学>、文学研究にグラフ、地図、樹状図を導入することで新たな手法をもたらし、また一方で人文科学の研究手法を用いて資料の悉皆調査を行った成果に対し、追試験可能で論理性に基づく分析手法が有効であることを示し、恣意的なものにすぎなかったコンピュータ・サイエンスの人文科学への応用研究の成果を明確に局所化した<文学に関する領域と認知科学及びコンピュータ・サイエンスの統合・拡張>のアプローチ3点を兼ね備えた領域横断的な試みである。メディア変換の手法獲得を展望したのは、本研究の領域横断的な性格を工学と人文科学の中間的な鶴のような存在で終わらせないためにも必要な研究姿勢と考えたためでもある。

## 11. 展望に代えて

本論文5章で示した樹状図からも明らかなように、筆者は「注文の多い料理店」の刊本について、その生成過程の分析にコンピュータによる系統分析手法を適用した。既に公表した論文では樹上図を得る方法としてゲノム解析の手法を応用することを提案し、その有効性を実証するとともに、その他の技法の適用可能性についても示唆している。[森田 04] [森田 05a]

これに対して進化論の手法を文学研究に応用する考え方がある。[Whitfield 06] [Carroll 04] 確かに実証的ではあるが、文学テキストを人間の行動に関する膨大なデータベースであり「人類という種の自然史あるいは自然誌」とする考え方には、明らかにヨーロッパ文化に偏重した視点があることから汎用的な理論とすることを躊躇せざるを得ない。また、進化の過程の中で「こころ」が形成されたとする進化心理学との相違も明らかにすべきであろう。その事実もさることながら世界を記すための新たな Narrative として『種の起源』がいかに衝撃的であったのかを描いた[Beer 00]は、周辺にありながら注目すべき業績である。

こうした Literary darwinism と筆者の理論との間に唯一存在する共通項は、生物というコンセプトであろう。Literary darwinism の「生物」が人間であるのに対して、筆者の場合は、テキストを生き物と考える。出版点数の推移は、テキストの多様性を示すものであり、フローティング・ハイパーテキストは様々な Narrative の容器としてテキスト変容のモデルを示している。このように分析対象としてのテキストを生物と見做す手法を提示することができたわけだが、分析の次

には生成が控えている。既に当の生物学が「つくって分かる生物学」というコンセプトに基づき新たな大腸菌の「生成」を行っている。繁殖を行い、多様性を確保する生物としてテキストを生成することは、もはやスローガンやイデオロギーの段階を乗り越えていると考えられる。

### 参考文献

- [朝日新聞 05a] 朝日新聞記事: 「電車男」そろい踏み, 2005年6月9日(統合版).
- [朝日新聞 05b] 朝日新聞記事: 匂逃さず邦画復活の芽, 2005年6月23日(統合版).
- [Beer 00] Beer, G.: Darwin's Plot (2nd Edition), Cambridge University Press, 2000. (渡部・松井訳: ダーウィンの衝撃, 工作舎, 1998.)
- [Carroll 04] Carroll, J.: Literary Darwinism, Routledge, 2004.
- [藤田・森田 02] 藤田米春・森田均: ハイパーテキストの線形化, 日本認知科学会第19回大会発表論文集, pp.138-139, 2002.
- [藤田・森田・西島 01] 藤田米春・森田均・西島恵介: 文学におけるコミュニケーションの構造, 認知科学第8巻第4号, 日本認知科学会, pp343-351, 2001.
- [藤田・西島・森田 06] 藤田米春・西島恵介・森田均: 小説における会話を文の論理的関係, 日本認知科学会第23回大会発表論文集, pp.68-69, 2006.
- [Hobbs 90] Hobbs, J. R.: Literature and Cognition, CSLI Lecture Notes No.21, CSLI, 1990.
- [市川 05] 市川森一: 夢暦長崎奉行, 長崎歴史文化博物館, 2005.
- [石井 06] 石井理恵: 登場人物の履歴情報からの物語ネットワークの構成とそれを利用した物語の作成 -ハイパーコミックの一般化と自動化に向けて-, 人工知能学会全国大会(第20回)発表論文集, CD-ROM, 2006.
- [Jean 64] Raymond Jean: NERVAL par lui-meme, Editions du Seuil, 1964. (入沢・井村訳: ネルヴァル, 筑摩書房, 1975.)
- [KTN 05] 長崎国際放送(KTN): それからの少年たち -天正遣欧使節が伝えたもの-, 2005年12月12日19:00~19:53放送.
- [Meister 2003] Meister, J. C.: Computing Action -A Narratological Approach, Walter de Gruyter, 2003.
- [Meister 2005] Meister, J. C. (Edit.): Narratology beyond Literary Criticism, Walter de Gruyter, 2005.
- [宮沢賢治イーハトーブ館 95] 宮沢賢治学会: 宮沢賢治作品・研究図書資料目録, 宮沢賢治イーハトーブ館, 1995.
- [宮沢賢治学会 91-06] 宮沢賢治学会: 宮沢賢治ビブリオグラフィー・同ディスコグラフィー, 宮沢賢治研究Annual vol.1-16, 宮沢賢治学会イーハトーブセンター, 1991-2006.
- [Moretti 05] Moretti, F.: Graphs, Maps, Trees, Abstract Models for a Literary History, Verso, 2005.
- [森永 62] 森永種夫: 犯科帳, 岩波新書, 1962.
- [森田 00] 森田均: 受容理論と小説のハイパーテキスト化, 日本認知科学会テクニカルレポート No.32, pp128-136, 2000.
- [森田 03] 森田均: Web以前と次世代Web, 音楽著作権管理者養成講座テキストI, 社団法人音楽出版社協会, pp474-495, 2003.
- [森田 04] 森田均: 注文の多い料理店のグラフ・地図・樹状図, 国際情報学部紀要第5号, 県立

長崎シーボルト大学, pp117-131, 2004.

[森田 05a] 森田均: 文学テキストのハイパーテキスト変換, 博士(工学)学位論文, 大分大学, 2005.

[森田 05b] 森田均: フローティング・ハイパーテキストの基本コンセプトII, ことば工学研究会資料SIG-LSE-A501, pp.85-88, 2005.

[森田 05c] 森田均: フローティング・ハイパーテキストの基本コンセプト(仮結), ことば工学研究会資料SIG-LSE-A502, pp.53-58, 2005.

[森田 05d] 森田均: 「注文の多い料理店」のハイパーテキスト変換とその評価方法, 国際情報学部紀要第6号, 県立長崎シーボルト大学, pp.175-190, 2005.

[森田 06a] 森田均: 長崎コンテンツのメディア論的研究と資料デジタル化予備調査—天正時代の活版印刷と甲子夜話のハイパーテキスト化—, 県立長崎シーボルト大学「教育研究高度化推進費B」に係る研究報告書, pp.397-410, 2006.

[森田 06b] 森田均: Webの社会の日常と先端, 森田均, (社)音楽出版社協会音楽著作権管理者養成講座, pp.480-499, 2006.

[森田 06c] 森田均: テキスト変容過程のモデル化, 人工知能学会全国大会(第20回)発表論文集, CD-ROM, 2006.

[森田 06d] 森田均: ハイパーテキストからメディア表現の諸相を考える, 日本認知科学会第23回大会発表論文集, pp.134-135, 2006.

[Morita 99] Morita, H.: From dispersed text to hypertext Proceedings of the iwLCC1999, pp 20-23, 1999.

[Morita 06] Morita, H.: Literary Hypertext conversion, Proceedings of the 19th Congress of the International Association of Empirical Aesthetics, pp401-404, 2006.

[森田・藤田 01] 森田均・藤田米春: ハイパーテキスト文学論, 認知科学8(4), 日本認知科学会, pp.327-334, 2001.

[森田・藤田 02] 森田均・藤田米春: ハイパーテキストと小説の修辞, 人工知能学会全国大会(第16回)論文集, CD-ROM, 2002.

[森田・藤田 03a] 森田均・藤田米春: 小説のハイパーテキスト化とメディア比較, 日本認知科学会第20回大会発表論文集, pp.172-173, 2003.

[森田・藤田 03b] 森田均・藤田米春: 小説の表現形態に関するハイパーテキストを指標とした評価方法の検討, 人工知能学会全国大会(第17回)発表論文集, CD-ROM, 2003.

[森田・藤田 04a] 森田均・藤田米春: 文学作品のハイパーテキスト化における評価方法の精緻化, 人工知能学会全国大会(第18回)論文集, CD-ROM, 2004.

[森田・藤田 04b] 森田均・藤田米春: テキスト解釈のモデルとしてのメディア表現, 日本認知科学会第21回大会発表論文集, pp.156-157, 2004.

[森田・藤田 05a] 森田均・藤田米春: 文学におけるグラフ・地図・樹状図, 人工知能学会全国大会(第19回)論文集, CD-ROM, 2005.

[森田・藤田 05b] 森田均・藤田米春: フローティング・ハイパーテキストの基本コンセプト, 日本認知科学会第22回大会発表論文集, pp.302-303, 2005.

[Morita & Fujita 01] Morita, H. & Fujita, Y.: Reader Response Hypertext, Proceedings of the Third International Conference on Cognitive Science, pp512-515, 2001.

[Morita & Fujita 02a] Morita, H. & Fujita, Y.: Rhetoric for the Japanese Literary Hypertext, System Narratology IwLCC 2002 Proceedings of the PRICAI02 WS07, pp11-20, 2002.

- [Morita & Fujita 02b] Morita, H. & Fujita, Y.: Literary Hypertext -- toward a new kind of media representation --, Proceedings of the IEEE SMC '02, CD-ROM, 2002.
- [Morita & Fujita 03] Morita, H. & Fujita, Y.: Making of Literary Hypertext and Evaluation Method based on Media Characteristic, Proceedings of the 4th International Conference on Cognitive Science, CD-ROM, 2003.
- [Morita & Fujita 04] Morita, H. & Fujita, Y.: Secondary Variations and Hypertext, Proceedings of the 18th Congress of the International Association of Empirical Aesthetics, pp470-475, 2004.
- [Nerval 1854] Nerval, G.: Sylvie, Les Filles du Feu, D.Giraud, 1854. (入沢康夫・訳, シルヴィエ, ネルヴァル全集第2巻, 筑摩書房, 1975.)
- [NHK 96] NHK: 夢暦 長崎奉行, 金曜時代劇 1996年3月29日~9月6日放送, 1996.
- [乙 03a] 乙一: Calling You, きみにしか聞こえない Calling You, 角川スニーカー文庫, pp.5-60, 2003.
- [乙 03b] 乙一 (原作): きみにしか聞こえない (スニーカーCDコレクション), ムービック, 2003.
- [乙 03c] 乙一 (原作): きみにしか聞こえない Calling You (都筑せつり), きみにしか聞こえない Calling You (あすかコミックスDX), 角川書店, pp.1-66, 2003.
- [乙 03d] 乙一: Calling You, 失はれる物語, 角川書店, pp.5-47, 2003.
- [Rumelhart 75] Rumelhart, D.: Notes on a schema for stories, in: Bobrow, D. & Collins, A. (Edit.) Representation and Understanding, Academic Press, pp.211-236, 1975.
- [佐久間 06] 佐久間友子: 行程規則を用いた複数のストーリーの合成 -ストーリー自動生成機能を持つストーリー生成支援システムへの一アプローチ-, 人工知能学会全国大会 (第20回) 発表論文集, CD-ROM, 2006.
- [昭和堂04] 昭和堂: 私は諫早生まれのコンスタンチノ・ドラード, 昭和堂, 2004.
- [Turner 96] Turner, M.: The Literary Mind, Oxford University Press, 1996.
- [ユニオン 03] ユニオン映画: 長崎犯科帳vol.1-7, キングレコード, 2003.
- [Whitfield 06] Whitfield, J.: Literary darwinism: Textual selection, Nature 439, pp.388-389 (26 Jan 2006).
- [Пропп 69] Пропп, В. Я.: Морфология сказки, Изд.2е, Наука, 1969. (プロップ著, 北岡・福田・訳, 昔話の形態学, 水声社, 1987.)

付記: 本論文は, 平成15~17年度文部科学省科学研究費 (萌芽研究) 補助金 (課題番号: 15653034) による研究成果の一部である。